

魚沼市小出地域の植物 (1)

富永 弘

2007年は、1世紀ぶりの少雪の冬であった。この少雪を契機に、少しずつ小出地域を中心とした植物の観察を始めてみた。

新潟県の植物の分布状況については、「植物同好じねんじょ会」等の努力により、かなり詳しい調査がなされている。成果の一端は「新潟県植物分布図集」として公刊され⑩、全国的にも高い評価を得ている。一方で、この分布図集を見ると、多くの種類について、魚沼市と周辺部が分布の空白域となっている。多くの場合は、当該の種が生育しないのではなく、調査されていないことによるものようだ。近隣の小千谷市や南魚沼市では、植生調査の結果が公にされているが、魚沼市域においては、ごく断片的な報告を散見するのみである。

筆者は、「小出周辺において分布限界となる植物も少なくないのでは?」と、漠然と感じている。越後の平野部と塩沢・湯沢の県境部との中間に位置する小出地域の植生情報は、単に調査の空白部を埋める以上の意義があるものと考えたい。身近な、それ故にこそ破壊もされやすい自然の姿を記録し、その環境が後世に残されるように微力を注ぎたいものと思っている。もとより筆者の力に余ることではあるが、今日の状況では、環境保全どころか記録にさえ留められずに消えていく生物種や個体群が多く、強い焦りをも感じている。

この場をお借りして、データの空白部：小出周辺地域の植物の観察結果をお伝えしたい。今回は、マネキグサ、ヤマアイ、ユキグニカンアオイの3種について報告する。

1) マネキグサ *Lamium ambiguum* (Makino) Ohwi

2007年の調査で、新潟県では佐渡にしか記録のなかったマネキグサに出会った。最初に見たのは初夏だったが、当初は名前も属も判らなかつた。「シソ科には違いなからうが、何だろう? ヤマハッカの仲間か?」と思いながら開花を待ち、週に一回以上の観察を続けた。7月の末になってようやく開花し、名前さえも知らなかつた「マネキグサ」であると判明した。植物体は腰ぐらいまでの高さがあつて、茎に分枝も見られ、図鑑の記述に照らせば「生育状況は良好」と認められた。しかし、生えている場所は一箇所のみであり、個体数もせいぜい数十株というところであろう。



写真1 マネキグサ群生



写真2 マネキグサ花

生育地は、スギにアカイタヤ等の広葉樹が混じる、それほど暗くはない林床である。標高約170m、冬季は2mくらいの積雪に覆われると思われる東向きやや急な斜面だが、土壌には湿り気が多く、ミヤマイラクサやウワバミソウ等と混生していた。上部の各節(葉腋)に数花をつけていたが、何よりの特徴は、暗い紅紫色の濃い花の色だろう。花冠の周辺部にはおしゃれな白い縁どりがあり、いっそう印象を強くしている。花冠の形態等から、オドリコソウの仲間であることを納得した。上唇が兜上に膨れ、がく歯の先は刺状にとがっている。葉は三角状卵形で長柄と大き目の鋸歯があり、下部の葉は基部が浅い心形になるものもあった。葉の質は薄く、触ると柔らかくて軟毛が多いという印象だった。ほとんどの個体には粉白状の付着物(ウドンコ病菌?)が認められ、生育に問題はないと思うのだが、少し気になっている。

図鑑等によれば、「神奈川県以西に生育」とされているし、関東地域の生育情報は極めて限られ、それも真偽の確認が必要な状況であるらしい。関東以西の生育情報をネット検索してみても、多くの場合は生育量も限られ、ほとん

どの県でレッドデータブックに登録されているようである。

対馬暖流に洗われる佐渡は、本県の生物分布上で特殊な位置を占めている。このたび越後の多雪地域における生育が確認されたことは、極めて貴重なデータと考えている。今後も、隔離分布の典型とも言えそうな生育地の観察を続け、その周辺環境とともに、永く保全されるように見守っていきたい。

マネキグサ生育地の植生 070908

①スギの疎林下

マネキグサ	4	ミヤマイラクサ	3	アカソ	2
ウワバミソウ	2	ミドリヒメワラビ	+	ジュウモンジシダ	+
スマレサシシソウ	+	ハグロソウ	+	ムカゴイラクサ	+
ウリノキ	+	ドクダミ	+	コウライテンナンショウ	+
ヤマノイモ	+	リョウメンシダ	+	ミズヒキ	r
ゼンマイ	r	ヤマグワ	r	ミゾシダ	r
イヌシダ	r				

②スギ・ケヤキ・アカイタヤの疎林下

マネキグサ	3	ミヤマイラクサ	2	ウリノキ	1
ウワバミソウ	1	アカソ	+	ホウチャクソウ	+
ヤマグワ	+	リョウメンシダ	+	ケイタドリ	r

2) ヤマアイ *Mercurialis leiocarpa* Siebold et Zucc.

魚沼市の山地にヤマアイが生育していることは、自身の目で見るとまでは少しも意識になかった。おそらくは、新潟県内の植物に詳しい方にとっても同様なものではなからうか。ヤマアイは、若い頃に弥彦山塊などで何回か目にしたことがある。最初に出会ったのは角田山だったように記憶するが、「この植物は何だろう？ そもそも、何科に分類されるのだろう？」といぶかしんだことを覚えている。ヤマアイという名前も、それがトウダイグサ科に属することも、まったく新鮮に思えた。30年以上を経ても、その時の印象は強い。以来ずっと出会わずにいたが、時おりは初対面の際の鮮烈な印象を思い出し、ほかの記憶とともに懐かしんでいた。

そのヤマアイに、小出の山地で出会ったときは本当に驚いた。とある急斜面の窪地の一部が、ヤマアイに埋め尽くされていたのである。かすかな踏跡もあったが、何株かを踏まなくては進むことができなかつた。純群落と呼ぶのだろうか、これほど大きな群落は見た覚えがない。そもそも、ヤマアイが絨氈のように一面に生えるという認識もなかつたので、息をのんだ。付近に見られる植物は別記のようであるが、アカイタヤ等の疎林下の、割合に明るい印象の場所である。この群落を見る限りでは、「ヤマアイの生育の中心は、魚沼地方にある」と結論づけたいほどだ。生育の勢いも盛んであり、上述のように足の踏み場もないほど生えているのだが(写真3)、周辺をかなり詳細に歩き回っても、他では1株も発見できなかった。

生育地は魚野川左岸の山地で、標高は約150m。東向きの斜面であり、冬季には例年ならば2mの雪の下になるであろう。新潟県内におけるヤマアイの分布状況は次頁の分布図のように知られているが、県境付近は別として、阿賀野川流域以外では、内陸部での生育は確認されていない(①, ②)。



写真3 ヤマアイ群落

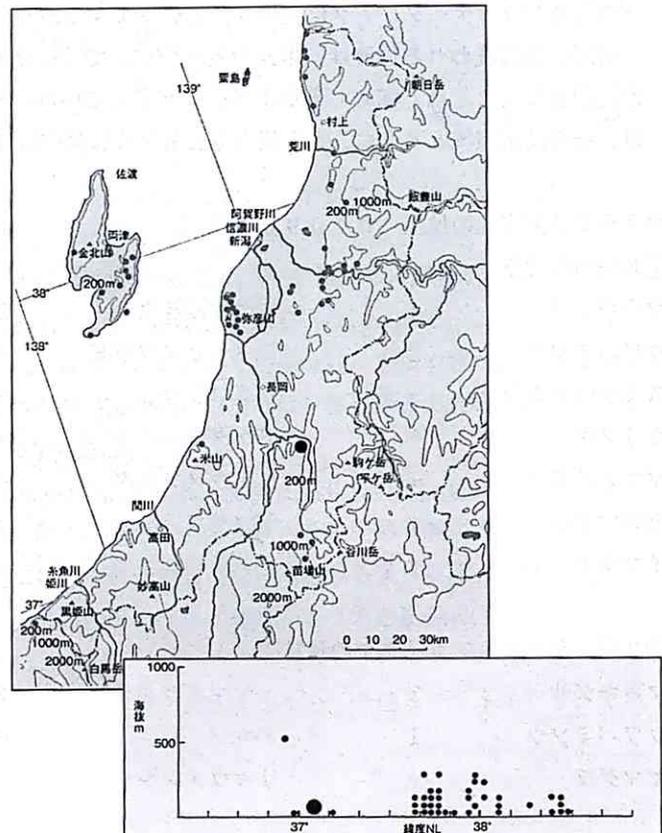


写真4 ヤマアイの開花(穂状につく雄花)

そのヤマアイが、言わば隔離分布のように、地理的・気候的な魚沼地方の中心とも言いえる場所に生育していることには、強い興味を抱かざるをえない。自分の目で見るとか写真でもないと、「本当だろうか？間違いではなかろうか？」と疑いたくなるくらいである。群落全体を仔細に観察したわけではないが、確認した個体は全て雄株であり、雌の株は現時点では未確認である。次の開花期には、より詳しく観察することとしたい。

ヤマアイ（純）群落の周辺植生

- 上層：アカイタヤ、ケヤキ、 ツルマサキ
 中層：ヤマモミジ、ツリバナ、ケアブラチャン、ユキツバキ、ハイイヌガヤ
 下層：サイハイラン、ケチヂミザサ、イヌワラビ、イワガネゼンマイ、ミズヒキ



ヤマアイの新潟県における水平分布と垂直分布(●) 大きい●(追加分布)

3) ユキグニカンアオイ *Asarum ikegamii* (F.Maek. ex Y.Maek.) T.Sugaw.

ユキグニカンアオイは、新潟県の植物を語るときに欠かせない碩学、池上義信先生の名前を記念した学名がつけられている(◎)。新潟県内でも積雪の多い地域として知られている、魚沼市干溝産のユキグニカンアオイの花の観察結果を報告する。使用したサンプルは76個で、異例の少雪であった2007年の春、大池川流域の標高200m地点で採集した。採集地は、沢に沿った南向きの背の低い雑木の林床で、ミズナラやマルバマンサク、ヤマモミジ等のいわゆる“ポイ山”（薪炭林）の一角である。核型等は調べていないが、同一のポピュレーションからの採取と言えるであろう。採集した4月末の時点では、まだ木々の葉が展開しておらず林床は明るく、ユキグニカンアオイは、カタクリやナガハシスミレとともに開花していた（写真5、6）。

花冠だけを採集して、乾燥しないうちに大きさ等を計測した。観察結果は図1～5のとおりである。前川の記載に比べ数値が若干大きめになっているが、誤差を考慮しても、種の標準的な姿とその変異幅の一端を推測できるものと考えている。最も頻度の高かった数値で記すと、「がく筒の長さは8ミリ、幅は10ミリ、開口部の径8ミリ、がく筒内の隆起線は11本、色は淡い暗紫色」という結果になった。

筆者は、魚沼市の旧小出町地域で、ウマノスズクサ科植物5種の生育を確認している。コシノカンアオイ、ユキグニカンアオイ、ミチノクサイシン、ウスバサイシン、ウマノスズクサである。県内稀産のミチノクサイシンは、狭い小出地区ではあるが、2箇所に生育している。前川は、魚沼市周辺地域において、コシノカンアオイとユキグニカンアオイが、フォッサマグナの境界（ほぼ魚野川と破間川を結ぶライン、新発田—小出構造線としても知られている）で、分布を異にする傾向が強いことを述べている。すなわち、境界



写真5 ユキグニカンアオイ

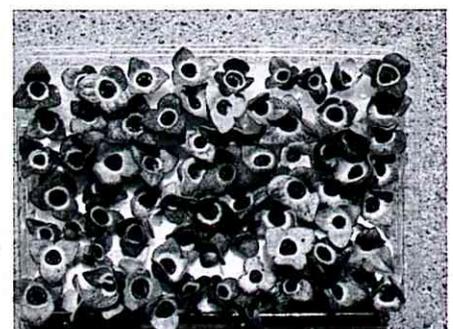


写真6 計測に使用した花冠

の西側（フォッサマグナの内側）には主にコシノカンアオイが、東にはユキグニカンアオイが分布していると記している。新潟県を中心にしたカンアオイ属の分類と分布に言及した菅原の報告でも、両種の分布について同様の傾向が示唆されている③。

筆者の印象では、小出の西山地域（魚野川左岸）から旧堀之内町にかけては、他の地域と比べてもコシノカンアオイの生育密度が非常に高い。その一方で、魚野川右岸（小出インターの東方：干溝）の山地では、かなり詳細に探してみても、コシノカンアオイは確認できていない。他の何種類かの植物に関しても、小出地域における魚野川左右岸で、分布にかなりの差があるように感じている。カンアオイの仲間の分布とともに、生育状況の調査を継続する予定である。

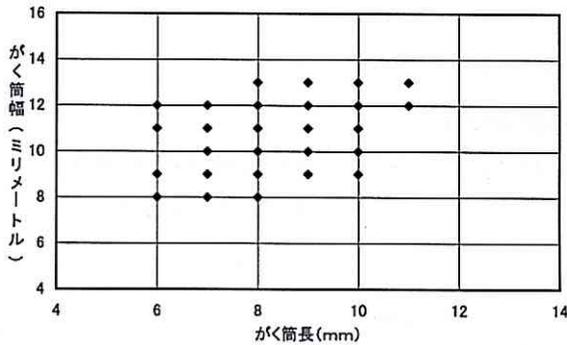


図1 がく筒長と幅の関係
(サンプル数：76)

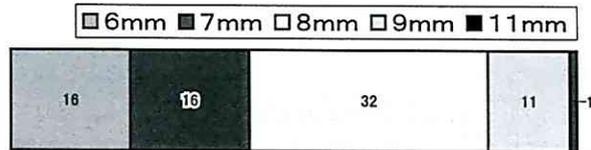


図2 がく筒開口部の直径
(サンプル数：76, グラフ内の数値は個数)

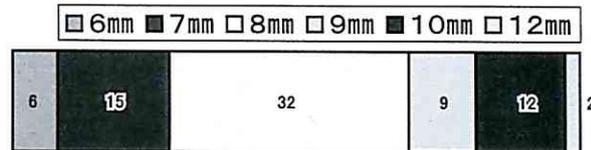


図3 がく筒長の変異
(サンプル数：76, グラフ内の数値は個数)

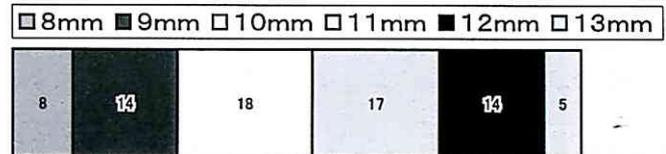


図4 がく筒幅の変異
(サンプル数：76, グラフ内の数値は個数)



図5 がく筒の色
(サンプル数：76, グラフ内の数値は個数)

文献

- ①池上義信（監修）・石沢 進（編集）（1980～2000）新潟県植物分布図集 1～20, 植物同好じねんじょ会
- ②湯沢町史編纂室（2005）湯沢の自然Ⅲ－植物－, 湯沢町教育委員会
- ③前川由己（1988）新種ユキグニカンアオイについて, 植物研究雑誌第63巻：33－38
- ④SUGAWARA T(1988) A taxonomic study of *Asarum megacalyx* F. Maek and related taxa (Aristolochiaceae) distributed in Niigata Prefecture and adjacent areas of Japan, Acta Phytotax. Geobot. 49 (1) : 1－17